

## 次世代に語り継ぎたい...

# 『古河のむかしばなし』

花火、縁日、盆踊り・・・夏の夜の定番にもいろいろありますが、やはり夏の定番といえは「怪談ばなし」をあげる方も多いのではないのでしょうか。仲間と集まって怖い話に背筋をぞくつとさせた経験、皆さんにもあるのでは？

古河にも怪談めいた昔話や伝説が数多く伝えられています。それらは古河市史編さん事業の一つとして昭和53年にまとめられた『古河の昔話と伝説』や昭和58年刊行の『古河市史民俗編』に紹介されています。

えっ？「そんな小難しいのじゃなく、もっと手軽に読める本」ですか？

ご安心ください。今回は親子で楽しめて、失われた昔の古河を偲べる、そんな本を紹介します。昭和61年、北下総文化調査会より発行された『古河のむかしばなし』です。

古河に伝わる数多くの昔話・伝説から16話を選びだし、日本児童文学者協会会員の一色悦子・本木洋子の両氏が再構成、また、それぞれの話には古河出身の洋画家・猪瀬開蔵氏の素朴な絵が添えられ、大人も子供も楽しめます。

本来、昔話は親から子へ、子から孫へと代々語り継がれてきました。しかしながら、核家族化が

進むにつれ、また、テレビ、コンピュータゲームといった子供の娯楽が増えたこともあり、昔話とはもはや語られなくなりつつあります。昔話の消滅は、単なる子供の娯楽の一つがなくなるにとどまらず、世代間、そして地域の人と人とのつながりが失われるといっても過言ではありません。

この夏は『古河のむかしばなし』を親子で楽しみ、自分の住んでいる地域に伝えられてきた昔話をおして、世代間のコミュニケーションを深めてみてはいかがでしょうか。

最後に、暑気払いも兼ねて、『古河のむかしばなし』から「化けもの用心」をさわりだけ...

つめたい霧雨が、しょぼしょぼとふる晩だった。

横町から天神町に入り、地福院にさしかかったとき、墓場のあたりで緑色の

ポオーツとした光がみえたかと思うと、ゆらゆらゆれだした。

「化けもんだあ！」

留作は提燈をほおりなげて、吾助にしがみついた...

(企画展「原画でみる一色悦子の童話の世界」は9/5まで開催。『古河のむかしばなし』は文学館で1冊1000円で販売中)



「化けもの用心」の挿絵原画と『古河のむかしばなし』(右)